昭和四十年三月

宮崎県史蹟調査報告　第十集

宮崎県教育委員会

昭和四十年三月

宮崎県史蹟調査報告 第十集

宮崎県教育委員会

序

この報告書は、大正の初年、本県が全国にさきがけて古代の遺跡顕彰のために、東京、京都両大学、宮内省書綾部の協力を得て行なった西都原古墳群の発掘調査につづく、さらにその範囲を広めた大正六年度の調査の報告であって、当時、調査を担当された京都大学の浜田耕作博士と梅原末治博士が執筆されたものである。しかしながら故あって、遂に当時刊行されるに至らなかった。

この調査は、戦後盛んに行なわれつつある、いわゆる史前の時代における宮崎県下の重要な遺跡にわたってなされた最初のものというべく、しかも注目すべき成果を示したものである点において、今に一つの重要な文献として価値高いものと信ずる。

数年前、この報告書の原稿が幸にも執筆者の一人である梅原博士のもとに保存されていることを知ったので、同氏に請うて本県教育委員会に於いて刊行することとした。

このことについて、梅原末治博士のご配慮を得たことに深く感謝申上ぐる次第である。

昭和四十年三月一日

宮崎県教育委員会教育長　野口逸三郎

宮崎県史蹟調査報告

余輩ハ大正六年十二月廿六日京都帝国大学文科大学教務嘱托梅原末治ト共ニ京都ヲ出発シ、神戸ヨリ海路宮崎県延岡ニ至リ、仝月廿九日ヨリ宮崎県史蹟調査員若山甲蔵君ノ同伴ヲ得テ、延岡附近及ビ西臼杵郡高千穂村ヲ踏査シ、次デ大正七年一月六日陸路宮崎町ニ向ウ。宮崎ニ於テハ宮崎神宮附属徴古館ニ出陳セル遺物ヲ調査シ、一月八日宮崎ヲ発シ、宮崎郡瓜生野村柏田附近ヨリ東諸県郡綾村ノ遺跡ヲ発掘シ、更ニ宮崎町ニ帰リ、一月十一日宮崎郡清武村ノ遺墟ヲ実践セリ。其ノ調査発掘スル所ハ悉ク石器時代ノ遺跡ニシテ近時考古学上最モ興味アル問題ニ接触セルノミナラズ、日向ノ先史時代及原史時代ノ研究ニ重要ナル資料ヲ供給スルモノアリ、今マ次ニ其ノ調査ノ結果ヲ報告スルニ際シテ、余輩ハ宮崎県ノ官憲幷ニ地方諸有志ヨリ受ケタル厚意ト助力トヲ深謝シ、特ニ始終同行シテ調査ノ労ヲ分タレタル若山甲蔵君ニ向ツテ感謝ノ意ヲ表ス。

大正七年七月三十一日

京都帝国大学文科大学教授　浜田耕作

目次

頁

一　緒言……一

二　延岡附近の遺跡……二

1　苗圃内の遺跡……二

2　大貫村の貝塚……四

三　三田井の遺跡……五

1　上原平の遺跡……六

2　猿伏附近の遺跡……七

3　岩戸村其他にて既出土の土器……八

四　宮崎附近の遺跡……一〇

1　柏田直純寺の貝塚……一〇

2　綾村尾立の遺跡……一一

3　加納の遺跡……一六

五　各地に於ける古墳……一九

図版及挿図目次

図版

頁

第一(上) 浄土寺貝塚の発掘……四・五

(下) 猿伏遺跡の発掘……四・五

第二(上) 尾立遺跡の全景……一三・一三

(下) 同上B地点の発掘……一三・一三

第三 綾村尾立遺跡出土縄文土器……一三・一三

第四 綾村尾立遺跡出土縄文土器破片……一三・一三

第五 綾村尾立遺跡出土石器類……一三・一三

第六 清武加納遺跡出土弥生式土器……一三・一三

挿図

頁

第1 南方苗圃発掘地点図……三

第2 大貫発掘地点図……四

第3 三田井上原平遺跡断層略図……七

第4　猿伏遺跡発掘地点略図……七
第5　岩戸村等発掘弥生式土器形状図……九
第6　柏田貝塚発掘地断層略図……一〇
第7　綾遺跡発掘地点及断層略図……一三
第8　綾発掘土器形状図……一四
第9　加納遺跡発掘地断層略図……一六
第10　加納遺跡一部状況……一七
第11　加納遺跡出土土器形状図……一八
第12　苗圃内石棺及野田石棺実測図……二〇
第13　大貫村古墳石室実測図……二三

宮崎県史蹟調査報告

浜田耕作
梅原末治

一　緒言

宮崎県に於ける吾人の調査は従来、西都原に於ける古墳発掘を主としたりしも、今回は聊か其の範囲を変更して、宮崎県全部に亘りて、石器時代、殊に所謂弥生式土器を伴出する遺跡の発掘を試み、其の土器の性質と存在状態とを詳にし、又た縄紋土器との関係を闡明せんことを努めたり。由来縄紋土器は我国多数の学者の以てアイヌ人の祖先の遺す所なりとし、従って之を発見する地点には彼等の占拠せるを予想せしむ。宮崎県に於いては既に宮崎中学校附近、（考古学会雑誌一ノ一〇、若林勝郎氏論文）西臼杵郡高千穂村等に於いて之を発見せるものあり。又た弥生式土器は其の製作者に就いて、議論あり、或いは原日本人のものなりとし、或は倭人隼人の族のものなりとし、議論区々にして帰する所を知らず。而かも其の或は縄紋土器と同一地点に於いて発見し、或は弥生式と縄紋との中間的性質を帯び、孰れの範疇に入る可きかを判定するに苦しましむる土器なきに非ず。茲に於いて、学者或はアイヌに次いで原日本人或は隼人族の帰来ありとし、或は両者の雑居ありとなし、或いは中間的土器を以て文化技術の交渉の結果なりとなす。余輩亦た別に所見ありと雖も、要するに此の問題は我国石器時代の人民の人種を推定し、終には吾人の祖先を明にす可き問題に接触し、其の関わる所や頗る重要なるものありて存す。近時我国学者の研究亦た此の問題に集中せらるゝが如き観あり。是れ余等が特に今回是等石器時代の遺跡の調査を試み、学者研究の資料を豊富にせんことを期せる所以に外ならず。固より其の調査する所は宮崎県に於ける這種遺跡の全般にあらず、其の発掘亦た小規模にして試掘的のものに過ぎざりしが、なほ其の結果は頗る興味あるもの尠しとせず。以下余等調査の順序に従って、其の次第を記するに方りて、吾人は専ら事実の報道を主とし、自己の所見によりて之を処理するを避けたり。是れ此種調査に於ける吾人の取る可き態度なるを信じたればなり。

二　延岡附近の遺跡

延岡附近に於いて吾人は南方村大貫の貝塚及び南方村県苗圃村の石器時代遺物発見地を調査せり。大貫貝塚は恒富村大字沖田のそれと共に故三浦敏氏の調査に依りて夙に学界に紹介せられしもの。南方村の遺跡は前年県の苗圃を設くるに際し多くの石器類を発見し、又た有馬七蔵氏の熱心なる採集に依り、幾多の貴重なる遺物の存在を知るに至れり。今ま左に苗圃、大貫の二遺跡に於ける調査の結果を述ぶる所あらむ。

1　苗圃内の遺跡

南方村県営苗圃は延岡町の西方約一里半にあり。五ケ瀬川と其の一小支流の間に起伏せる丘陵の北部を占め、東西約五町南北二町余の一の高台なり。遺物は此の高台の全面に亘りて存在し、三四の円形古墳又た其の間に介在して古くこゝに聚落の発達したるを想像せしむ。

此の地域より出土する遺物は石器、土器を主とし、玉類も往々にして発見せらる。有馬氏の蒐集の石器数百点に上れり。吾人又た十二月廿九日調査の際十数の石器と土器の破片を獲たり。石器の類には石斧・石鏃・錘石等あり。石斧には打製磨製あり、石質は多く砂岩若しくば安山岩にして形式又た各種に亘れり。石鏃は打製品其の大部分を占むるも磨製の遺品亦た少なからざるは注意す可きなり。中に製作頗る巧妙にして金属器によりて製作せるを推察せしむるものあり。有馬氏所蔵に係る二個の如き是れなり。石質は打製石鏃にありては黒曜石、玻璃質安山岩等を以て製作するを常とせるも、此の地の発見品には砂岩製の粗末なる遺品多し。而して其の形式は各種に亘れるもたゞ柳葉状のもの及び篦代を有するものは見当らずと云ふ。錘石は発見の数量石斧石鏃と共に比較的多く、吾人又数個を獲たり。製作砂岩の丸石の両端を一部分打ち缺きたるものなること多くの例に異なるなし。以上の外石器には猶磨製石剣あり。余等の調査に當り採集せる所にして鋒の部分を缺くも形式略ぼ見るべく、質は粘板岩なり。此の種の遺品は九州北部、近畿等に於て往々類例あるものにして磨製石鏃と共に注意に値す。

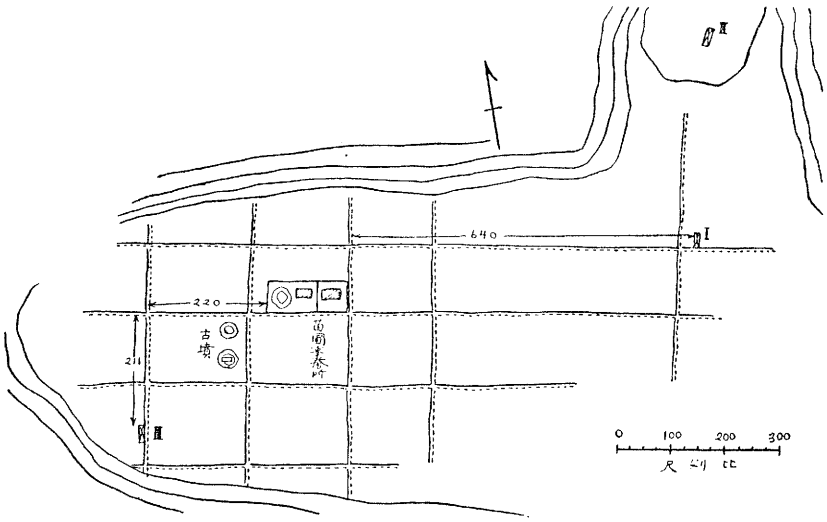
土器は従来発見のもの何れも破片のみなり。之を大別して凡そ二種類となす可く、其の大分を占むるは弥生式土器の系統に属する赤褐色若しくば灰褐色の粗造品にて、壺の口部、仝底部、台の一部分、高坏の脚等の破片あり。其の底に無花果形の壺の破片の存せるあるはよく

此の土器の特徴を現はせり。表面の文様は直線紋を主とすること普通の弥生式のそれと一般なるも、往々口縁部に縄紋を附せるものを混じたり。而して表現の手法概して粗大なるを見る。他の一は斎瓮にして之は焼方頗る堅緻なるもの多く、形状は坏の破片を主とし中に壺の類をも認む。

玉類は有馬氏の聚集品に頗る注意す可きもの多し。石質は碧玉、或いは琅玕其他諸種あり。曲玉は凡て細小にして、或は丁字形の切目を有し、整形のものありと雖も、其の穿孔の一方頗る大なること、各々形状の特異なる点等頗る原始的の形を有し、古墳曲玉とは稍趣を同じくせざるもの尠なからず。或は時に櫛形のもの、又た不整形の石片、及板状にして一面に各二箇の連続せる貫孔を有せるもの等あり。此等の玉類は丹後函石、淡路松帆村等の遺跡発見のものと其の性質相似たるものあるを覚ゆ。

要之苗圃に於いて発見する遺物は其の各種を含む点に於て注意に値すべく、殊に粗製の石器と共に金属器を以て製作せりと推測すべき精巧なる磨石鏃の存せるは原始的勾玉の発見と共に、此の種史前時代の遺跡研究に一層の興味を与ふるものあるを覚ゆ。乃ち吾人は是等の遺物の層位関係を調査せんが為に十二月卅日此の地域に於いて発掘を行うこととせり。

〔発掘の経過〕第一発掘地点は県苗圃の東北隅に当り、事務所々在地よりの距離凡そ二町の所を撰べり。附近より異形の勾玉両三を発見せることあり、今猶表面に土器片の散布を見るを以て、先づこゝに南北十八尺東西四尺余の一区を劃して発掘を試みたり。土質は大体に於いて表面のそれと同じき黒色土壌なるも地下一尺に薄き褐色の土層を見る。其の間遺物としては石器は勿論土器の破片すら全



第1図　苗圃発掘地点図

く包含せず、深さ二尺以上に達するも其の形迹なかりき。こゝに於て第一地点の北方約六十四間に於ける第二地点の発掘を行へり。之は未だ開墾を施されざる地域なるが、南北十二尺東西三尺の発掘の結果附近には土器の破片の散乱せるに係らず、内部の状態殆んど前者と同じく何等遺物を含まず、たゞ此の地は第一地点より北方高地の傾斜面にあるを以て従って褐色土層の地下二尺の辺にありしを異にするのみなりき。（第一図参照）

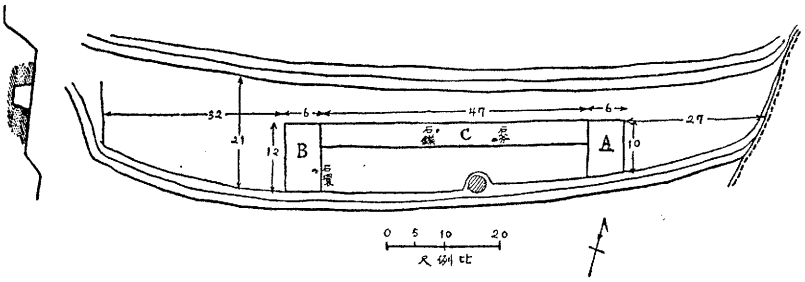
第三発掘地点は苗圃の南西隅に当れる所にして事務所よりの距離約百間あり。苗圃の遺跡中土器の散布の最も多き地点なり。断層面を験する便宜上前二者同様南北十八尺東西三尺の溝状の穴を穿てるに此の地点も亦地下に入るや全く遺物を包含せず。

此の発掘の結果に徴するに苗圃の遺跡は一種の遺物散布地にして、本来其の遺物包含の層位頗る浅く雨風の天然的作用及農業等の人為的作用によりて、土壌を其上に構成すること多からざるに似たり。従って今日に於いて上述各種遺物の相互の年代関係は之を明瞭になす能はざるも、遺跡の性質の弥生式系統に属するは畧ぼ認めて可なるが如く、而して各種の遺物は其の様式より推して、悉くが同一の時代のものにあらざるは推測に難からず。

苗圃内に上代墳墓の存するより考ふれば石器使用時代より金属器の行はれたる時代に亘り、こゝに住せる同一種族の遺跡と見るべきに近し。

2　大貫村の貝塚　〔図版第一〕

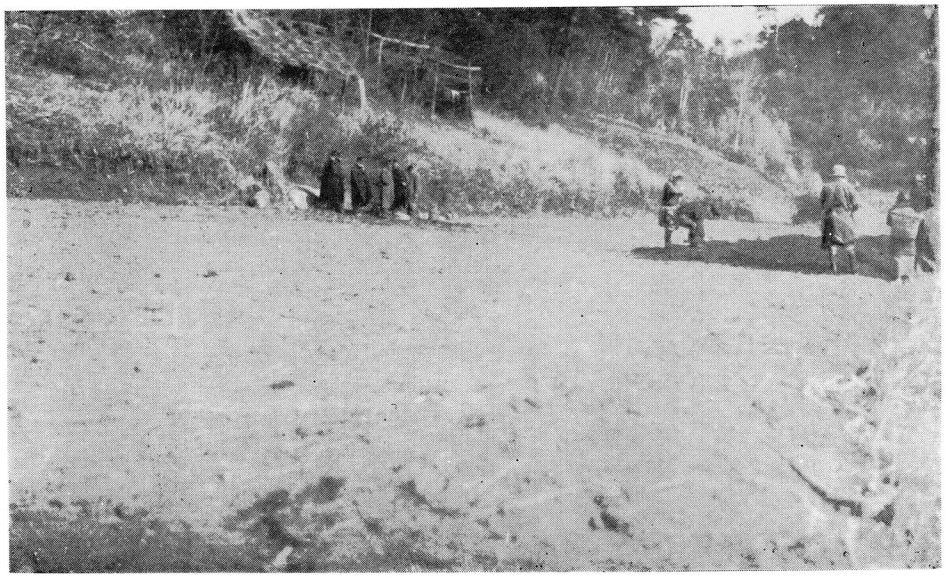
大貫村は南方村の大字にして五ケ瀬川の分流大瀬川の北岸に近く存する部落にして、両川の間に連なれる丘陵の一端にあり。貝塚は同村字浄土寺と称する丘陵の端に近き部分に存し、高台の南腹に多量に貝層の露はれたる個所あると共に、北半に於いても貝殻の散布を見、其の面積頗る広大なるものの如し。此の内前者は地形崖状を呈し、且つ竹樹密生せるを以て後者即ち台地の北方畑地に一部分貝殻の露出せる地点を撰びて、卅日午后より卅一日に亘り小発掘を試みたり。該地点は丘陵



第2図　大貫発掘地点図

図版第一

上　　東臼杵郡南方村大字大貫浄土寺貝塚の発掘



下　　西臼杵郡高千穂村字猿伏の遺跡発掘

の階段状をなして降下せる上段に位し、東西約二十間、南北約三間半内外の稍弓形を呈する区域なり。先づ東方に扁して東西六尺、南北十尺の一区（A地点と呼ぶ）を劃して発掘を試み、次に四十七尺を距てたる西方に畧ぼ同大の地域（B地点）を穿ち、而して後四尺幅の溝を以て両者の北半を連絡して以て貝層の状態を験したり（第二図参照）。

A地点にありては地下約一尺にして貝層に達し、其の貝殼は比較的大形のもの多く層の厚さ一尺内外あり。B地は之に反して貝層に多量の土砂を混じ層の厚さ明ならず、されど地下二尺に達すれば全く貝殼を見ざりき。C地の東西に長き溝状発掘地に於いては貝層の深さ及び厚さ必ずしも一ならず、畧ぼ中央の地点にては表土一尺三寸にして貝層に達し、以下層の厚さ一尺七寸あり。その西方数尺の所にては表土一尺貝層の厚さ一尺五寸なり。而して何れも表土に多少の貝殼を混ぜるを見る。此の地域中其の西の部分は貝殼破砕せるもの多く或は一度発掘せられしに非ざるかを思はしむ。是等の貝層を生成せる貝類は主としてカキ、ハマグリの種類にして往々シホフキ、及びアカニシの類を見る。而して之に混じて石器と比較的多量の土器破片を発見し、又猪等の獣骨片を得たり。石器類はA地点の東南隅に於いて石環の破片一個を出し、C発掘地の東端より十八尺の地点にて石斧一個を、同西端より十数尺にて石鏃を発掘せるあり。猶此の外四五の器と黒曜石の屑を見たり。

是等発見の遺物中石斧は発掘地域より出土せるもの三及び表面採集のもの二あり。磨製打製の両種と半磨製のものあり。その一箇は長二寸余の小形にて大体の形は打缺きて作れるも刃の部分のみは両側より磨研し、他の一箇は一面は磨き他面は精巧に打ち缺きたるを見る。打製石斧は砂岩製の分銅形にて南方村苗圃の遺品と同形式に属し、磨製石斧の一は精品なり。長四寸二分あり質は変質板岩にして頗る磨沢あり、薄く両側より磨研して両刃を附せる手法頗る見るべし。石環は半ば破損せるも、畧ぼ全形を窺ふべく、直径三寸五分あり。此の貝塚に於いては従来其の発見を聞かざる遺品なり。石鏃は吾人の採集せるもの僅に一個なり。黒曜石製にて三角形凹底式を呈す。有馬氏の談に依るに石鏃は此の地に於いては出土多からずと云ふ。此の外石器として円板形のたゝき石と思はるゝ遺品一あり。土器の類は多量に出土せるも何れも破片にて全形を窺ひ得るもの一もあるなし。一個の斎瓮（鉢の類の底）の破片を除きては悉く厚手の素焼にして、之に黒褐色と赤褐色の二者あり、手法共に粗大なり。破片に底の部分・胴の一部・口部の残缺あるよりせば原形は壺の類多かりしが如し。而して是等の土器は表面には一種の縄紋を附せるもの・切り目紋あるもの・簡単なる直線紋を表はせる等あり。一面に於いて所謂縄紋土器と類似あるも、而も全く同一にあらず、一面弥生式土器に似たる点のあるが如きものなるは注目に値す。

三　三田井の遺跡

西臼杵郡高千穂村大字三田井は日向の北西隅に偏在して、交通の便を缺くも、四周山を以て繞らされて、自から高台の一区劃をなし、古く

人類の占居して一集団をなすに適せるものあり。されば天孫瓊々杵尊亦た此処に降臨せるを伝ふるのみならず、既に幾多の古墳横穴と共に石器の発見せられたるもの尠からず。中村徳五郎、故三浦敏氏夙に之を紹介し、近くは喜田文学博士、鳥居龍蔵氏等の之を調査するありしも、其の石器の存在以外に、土器の種類及遺跡の状態に就いては、未だ詳密なる報告を缺くの憾あり。僅に高千穂村の北二里岩戸村より古く弥生式土器を発見せることの紹介せられたるあるのみ。乃ち吾人は今次の調査に方りて、高千穂村に於いて二箇所の小発掘を試み、同時に各地に於いて既に発掘採集せられたる遺物を巡覧して、主として此の方面の智識を得んことを期せり。

1 上原平の遺跡

吾人は先づ三田井に於いて村落の北方字上原平の一地点の発掘を試みたり。此地或は尾の上とも称し、高千穂盆地の中央部に当り、土地丘陵状を呈し、西北は傾斜急なるも、東南は馬蹄形の緩き傾斜面をなす。今ま全面開墾して畑となり、石器類多く地表上に散布し、土器の破片亦之に混ずるものあるを見る。発掘地点は高地の西南隅にある墓地より二十二間を距てる、三田井より陣内方面に通ずる里道の一部分を撰び、特に道に沿ひて長さ十二尺・幅五尺内外の一区を限りて発掘せり。蓋し畑となれる部分は当初開墾に際し大部掘りかえされ、且つ耕作の為今猶地下一尺の間は常に鋤去せらるゝを以て内部攪乱の恐れあり、層位的調査に遺憾の点多かるべきを思ひ、右の地点を取れるなり。

発掘は南東側の畑地に接する部分より漸次断層を作りて作業を行へるもの、其の結果に徴するに地表下約五寸は赭土にして以下九寸は土壌稍黒味を加へ来り表面より一尺四寸にして全く黒褐色となり、深さ三尺に至る間に多量の土器破片を包含し、石屑又之を認むるを得たり。而して此の層以下には厚さ五寸の黒土層あり、再び黒褐色の土壌となるも遺物は全く存在せざりき。此の状態は約二間の区域に就いて一様に認めたる事実にして且つ土壌攪乱の形迹なければ遺物包含の一斑を推察するを得可し。

此の小発掘に於いて獲たる遺物は殆んど土器の破片のみにして完全なる石器は一も存在せざりき。されど発掘以前に高地の一隅墓地の周囲に於て拾得せる石斧四五あり、石鏃又二三を得て畧ぼ其の概要を窺ひ得るなり。石斧は何れも分銅形の粗大なる打製石斧にして、長さ三寸乃至三寸五分なり。石鏃は黒曜石の三角形のもの多きが如し。従来発見のものには磨製石庖丁、磨製石鏃等あり。

さて土器は採集のもの悉く破片なるも様式上頗る注目すべきものなり。是等は黒褐色を呈せる薄手の素焼にして表面に光沢を有するあり。器の形状は口部大いに開け中腹に於いてクビレたる鉢の類多きを占むるものゝ如く、其の縁は平にして内側に突出し、一部分に耳状突起を現はせるあり、内外面に深き条線紋或は縄紋を附せるは全く関東地方の縄紋土器に一致せるを認むべし。此の外大なる壺の口部、頸

部に比較的複雑なる条線縄紋を施せる土器片、及び土器の底二三あり。底の形式は普通の弥生式とはその手法を異にするを見る。土器の表面に現はれたる文様は深き線刻りの地面に縄紋を附したるものを主として其の種類凡そ五種あり。縄目紋の帯を繞らせるもの、縄紋に切り目紋を加へたるなど其の異なれる一にして、中に縄紋土器特有の複雑なる曲線紋を現はせる破片二個あるを注意す可し。但し是等の文様を施せる部分は土器の頸部若しくば肩部に限り表面全体に及べるものを見ざりき。

上述土器の性質は何れも所謂アイヌの遺品とせらるゝ縄紋土器の特色を具備して弥生式とは全然異なる手法になれるを認む可し。吾人は高千穂に住せる古代民族の研究上に重要なる此の新資料を得たるを喜ぶ。

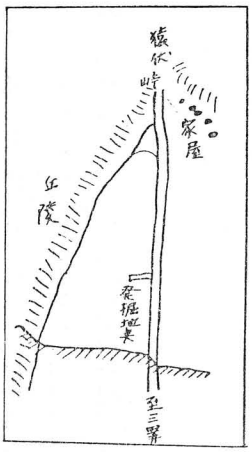
2 猿伏附近の遺跡

上原平に於ける発掘と同時に、吾人は一方字猿伏附近に於いて小発掘を試みたり。其の地点は猿伏村に至る道路に接したる左方の畑地にして、西北に丘陵を負ひ、聚落を距る西南一町余なり。吾人が特に此の地点を撰定せる所以は、道路によりて截断せられたる断面上に、土器の破片を認め、比較的攪乱の多からざる地表よりの深さを知るに便多きを思へるを以てなり。発掘の区域は道路に接し、畑地の表面に於いて、長十二尺幅五尺の溝を作り、深さ三尺余に及べり。遺物の包含は地表下二尺前後に於いて、土器の小破片若干と石斧一個とを認めたるのみにして、其の量頗る稀少なり。而かも地層は遺物包含線の上部に稍々、黄褐色なる粗鬆の壚堆質のものにして、其の下部は稍々黒色を帯びたるも、両者の間固より明瞭なる限界を認めず。

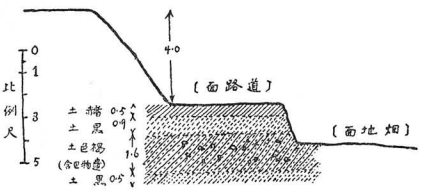
此の発掘に於いて余等の得たる遺物中、石斧は打製品にて長三寸一分あり、形は小判形を呈す。上述上原平に於て採集せると殆んど製作を一にせる粗製品なり。

土器は悉く小なる砕片にて量又た前者の如く豊富ならざるも、其の性質は研究上特記に値すべし。即ち大部分赤褐色の厚手粗質にして、之に一二黒褐色の表面磨研せる破片と赤味を多く帯びたる薄手破片とを混ぜり。何れも頗る上原

〔図版第一〕



第4図　猿伏遺跡
発掘地点略図



第3図　三田井上原平遺跡断層略図

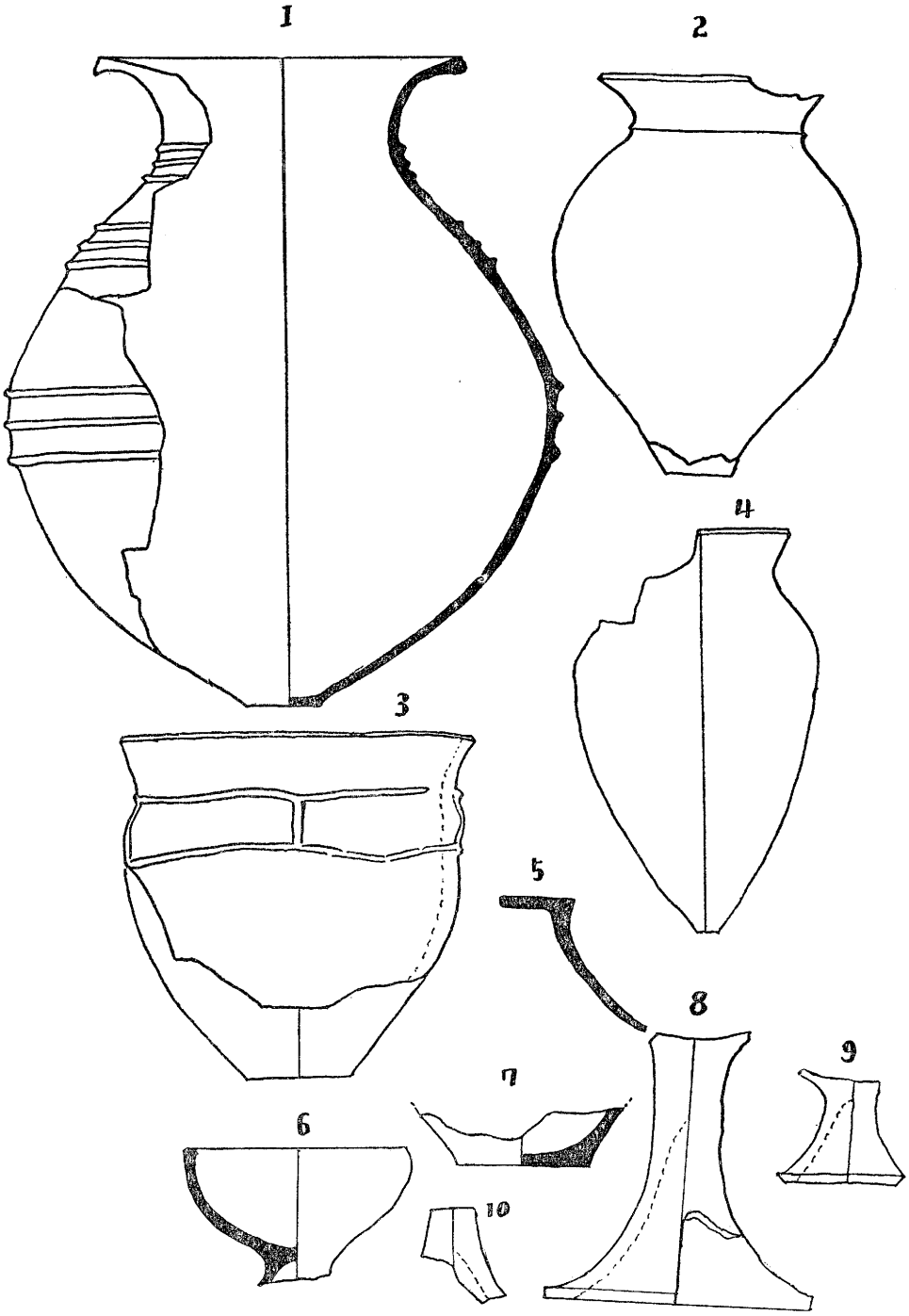
平の土器と性質を異にして寧ろ弥生式土器に近きものなるを思はしむ。一々の器の形の如何なりしかに至りては之を詳にすること能はざるも、大なる鉢・壺の外に頸部の外側に一条の突出帯ある小形の鉢、肩部の直角に近くクビれて更に口の開ける壺の破片等を認む。文様に至りては全面に加へたる刷毛目を除きては一二直線の条紋の口部の辺に装飾せるあるのみ。是れ又土器の性質上注意すべき現象なり。

3 岩戸村其他にて既出土の土器

高千穂における二箇所の小発掘を完了したる後、吾人は岩戸村に赴きて、同地岩戸神社社地にて古く文政四年発見せられる土器其他を見ることを得たるのみならず、又た西臼杵郡役所に於いて特に吾人の為め蒐集せられたる諸家の採集品を一覧することを得たり。就中特に吾人の注目を惹ける遺物にして、未だ世に紹介せられざるものを左に記載する所あらむ。

岩戸神社々地発見の土器には所謂弥生式土器に属し、尾張熱田貝塚出土品に似て其の寧ろ新型式に入る可きものあり。朱塗の大高杯（第5図の8）仝小高杯臺部（仝上9）杯（仝上6）等は此の類にして、又た並行せる凸帯を有する大形の壺の如きも、（第5図の1）色沢手法等より見て、弥生式の系統に属す可きものなり。次に黒褐色の土器にして紐状の装飾を有し、頗る古拙の手法を示せるもの（同上の3）あり。又は田崎則寿氏の蔵に係る三田井村尾谷出土の器と大小の差ありと雖も、同一手法に出で（仝上）普通彌生式土器の系統に入るるよりは、却って縄紋土器に似たるものあるを覚ゆ。此等異種の土器が如何なる状態によりて発見せられしか、之を詳にする能はざるも、同一地点より発見せられたることは特に注意を要する所たる可し。

又た岩戸村永ノ内より発見せられたる壺（仝上2）は黒褐色を呈せるも、其の型式大和新沢村其他より多く発見する彌生式土器と共通するを見る。岩戸村発見の他の壺（仝上4）は稍々其の形状を殊にし、少しく新型に近きも、同じく彌生式土器の系統に属するものなり。



第5図　岩戸村等発掘弥生式土器形状図

四宮崎附近の遺跡

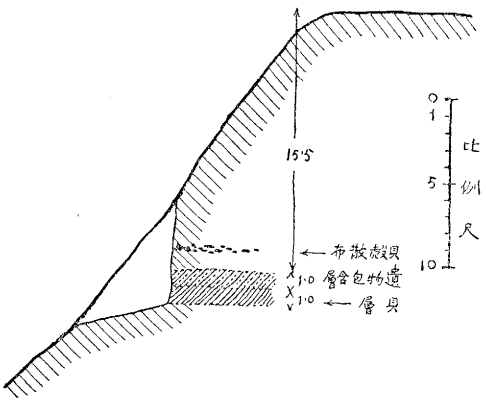
日向の南部、宮崎を中心とせる大淀川の流域には石器土器類の発見を伝ふる個所多く、高岡村城ケ峯には貝塚の存在するあり、当国に於ける先史時代の遺跡に富む地方として夙に学者の注意を惹ける所なりき。

近時此の地域において新に三個所の興味ある同時代遺物の発見地を認むるに至れり。即ち宮崎郡瓜生野村大字柏田直純寺の貝塚、仝郡清武村大字加納字下加納、東諸県郡綾村字尾立の遺物包含地是れなり。就中加納の遺跡は彌生式土器を豊富に包含し、尾立は一種の縄紋土器の彌生式土器・石器と混在せるあり、而して柏田は日向に類例多からざる貝塚として又た其の出土の土器は一種特殊の性質を帯びたり。吾人は今次の調査に際し此の三者につき各一部分の発掘を行ひて、遺跡の層位的研究を試むると共に特に発見の土器に関して考究を遂ぐるを得たり。

1 柏田直純寺の貝塚

柏田村は瓜生野村の大字にして宮崎町の北西約二里、大淀川に臨める村落にして、北方より延びたる丘陵の一端に直純寺あり、字を笠置と呼ぶ。寺の東腹に貝層の一部分呈露し、遺跡の存在を示せり。土地の状況は寺院の建設に際して著しく土工を施し、上部を平坦に築成せるを以て原形明ならず。現在高さ三十尺内外の台地上面より十六尺五寸の下腹に貝殻散在して、附近一帯は今竹籔となれり。

吾人は一月八日午前、此の貝層の露出面に於て、丘陵腹部の彎曲に沿ひ十数尺に亘る地域を削り取りて発掘を試み貝層と遺物包含の状態を験したり。竹籔の根の著しくからまりて作業困難なりしのみならず、之が為めに貝層は断続して其の層位を攪乱せられたる形迹少からず、完全なる調査をなすこと能はざりしも、大体に於いて貝層の厚は約二尺内外の如く、貝



第6図　柏田貝塚発掘地断層略図

殻はシヽガヒ、カキ、シホフキの類にして、而も其の量多からず。層中に土砂を混ずるも土器、石器の類は此の間に殆んど包含されず。遺物は主として貝層の上部一尺内外の辺に存在せるを認めたると共に又貝層の上面より約二尺の上位に貝殻を含める土層あるを知れり。これより推せば本来貝層は土壌を混じて其の層四尺に上りしか、或は又た竹木の根の為にかゝる変化を生ぜるか二者何れかならん。

此の小発掘に於いて採集せる遺物は石器と土器に限られ、他に何等の遺品をも見ざりき。就中石器は本貝塚にては従来多く発見されず、吾人の見たるもの僅に前川氏蔵の打石斧（今徴古館出陳）一のみなりしが、幸に今次密質の安山岩製の打製品一を得たり。長二寸七分あり、恐らく石斧の類ならむ。

土器は何れも素焼原手にして表面黒褐色を呈するもの多く、往々赤褐色、灰白色のものをも含み、外見所謂弥生式土器と異なり、寧ろ縄紋土器に近く、頗る原始的なる手法を現はせり。器の形状は発見の遺物悉く破片なるを以て明確にすべからざるも、比較的大形の壺、鉢の類に属するものゝ如く、径四寸三分ある底の一部、口部の開ける頸部破片、縁部に切り目ある土器鉢片等を見る。又注意すべきは赤褐色の高坏の一部と認むべき破片の存せる事なり。土器の表面に印せる文様は手法粗大にして普通の弥生式、縄紋土器と其の趣を殊にす。之を大別して約四種となすべし。直線交叉紋二種、不規則なる波紋、一種の鋸歯紋是なり。文様の要素は弥生式土器に見る所と相同じきが如きも、其の表現の手法を異にして古拙の感あるを見るべし。此の点は上述大貫貝塚発見の土器と類似せり。

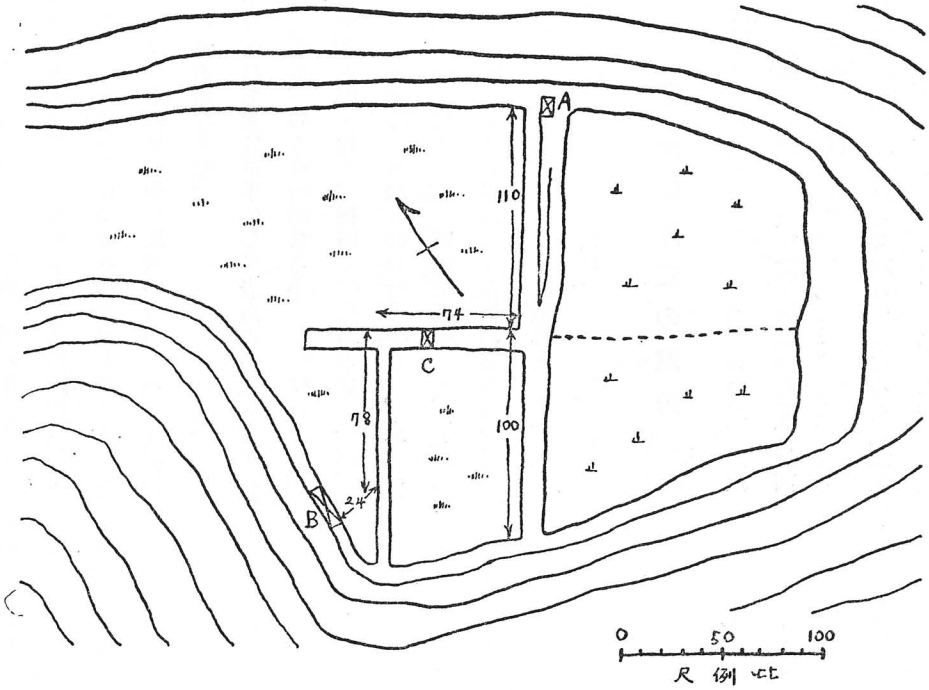
柏田貝塚は此の調査に徴するに遺跡として広大なるものにはあらず、遺物亦豊富と云ふべからざるが如きも、上述土器の一種の特色を有せる事は特に注意に値するなり。

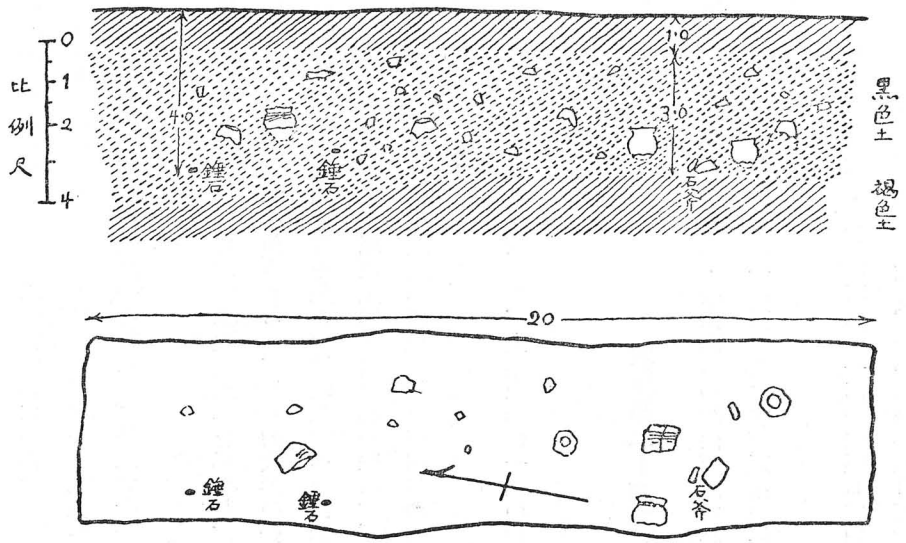
2 綾村尾立の遺跡

〔図版第二―第五〕

綾村は東諸県郡に属し、宮崎の西方約七里、大淀川の支流本荘川の灌漑せる地域にして、其の分流綾北・綾南両川の間山脉連なれる一部分に字尾立あり。此の地大字北俣の域内にて、標高二百三十七・九米突を示し、東西五町、南北三町余の一の高台をなす。東南眼界を遮るものなく風光頗る佳なり。

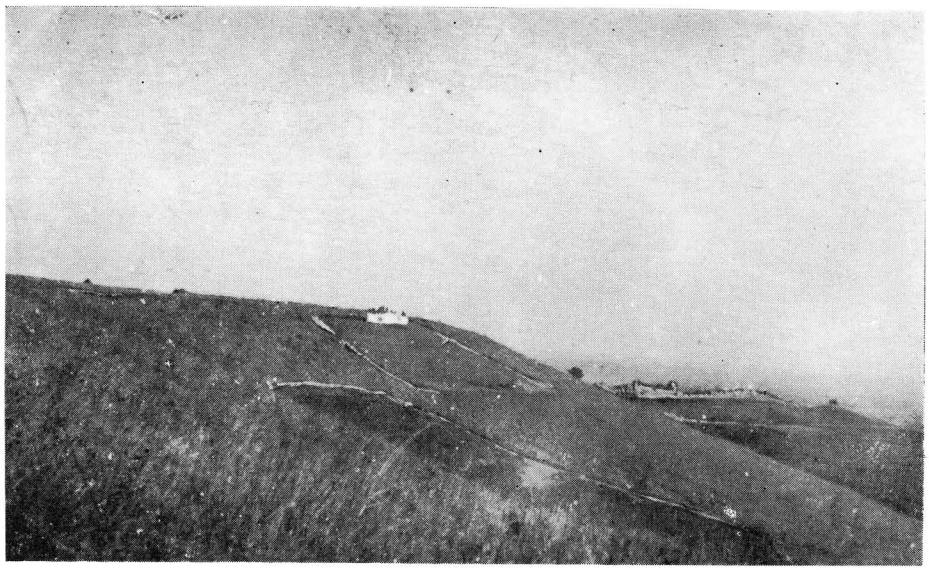
遺跡は此の全地域に存して頗る広大なるも土地僻遠の為従来世人の注意を惹かざりしが、大正元・二年の頃其の一部を開墾して畑地となすに当り、土器の破片を発見し、同地黒木熊袈裟氏に依りて県の当局者に報ぜられ、始めて遺跡の存在を知り、ついで昨年八月若山県史蹟調査嘱托、其の一部を発掘して多量の遺物を採集し今やその一部は徴古館に出陳せられ興味深き遺跡なるを認めらるるに至れり。



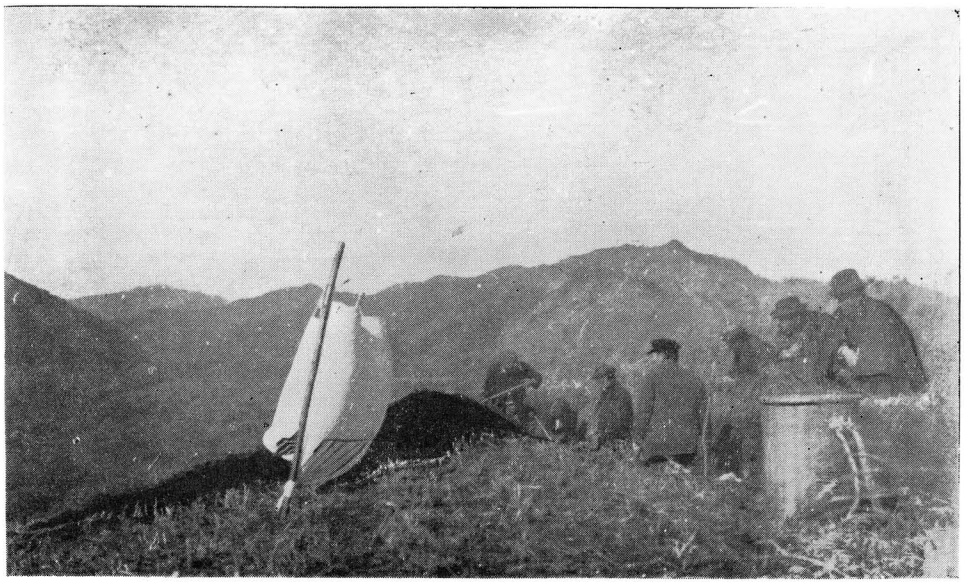


第７図　綾遺跡発掘地点及断層略図

図版第二



上　　東諸県郡綾村尾立遺跡全景



下　　東諸県郡綾村尾立遺跡B地点の発掘

図版第三

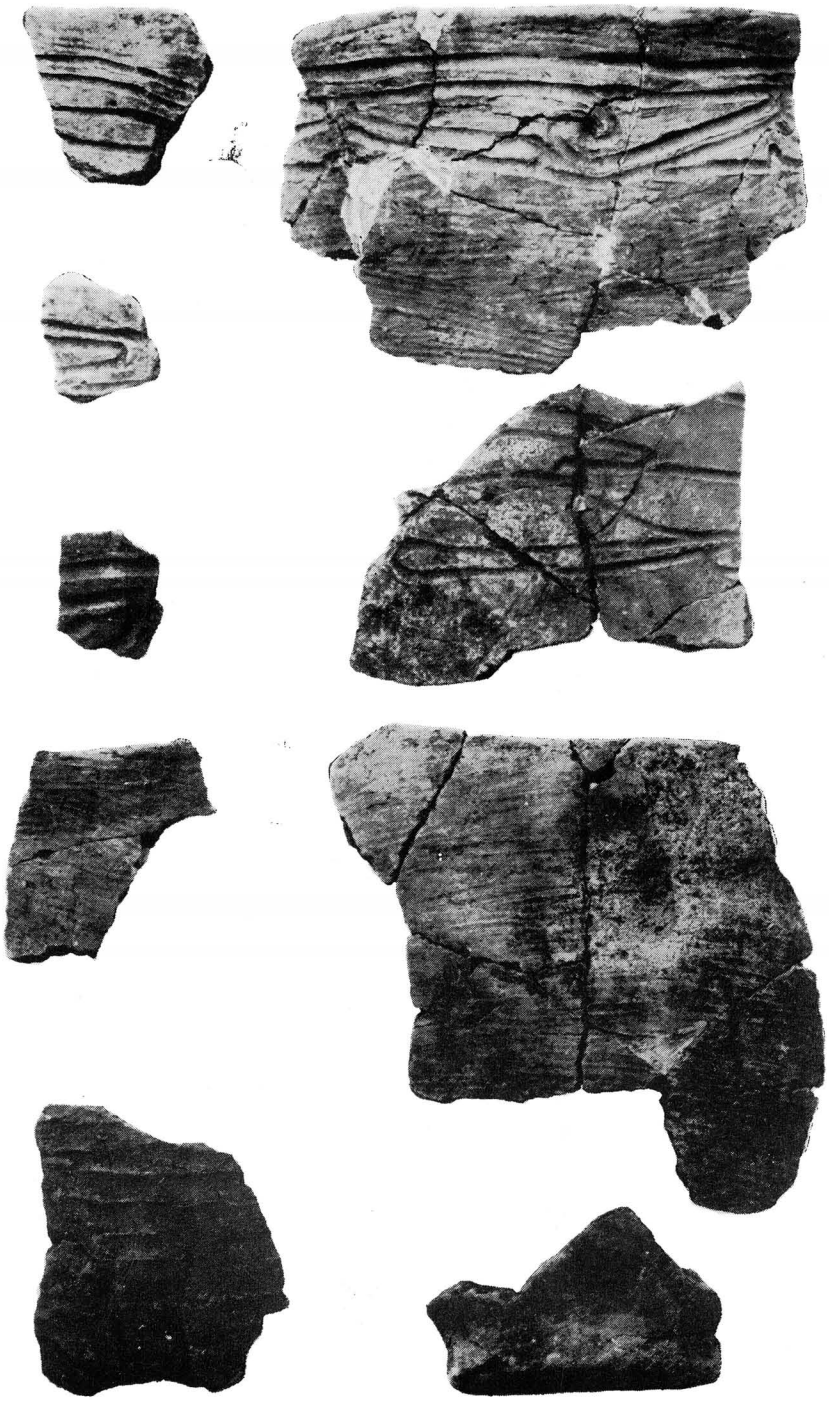
現高27糎（下復原）

綾尾立出土縄文土器（復原形）（現高二七糎）

同　上（復原形）（現高二三糎）

綾尾立遺跡出土縄文土器　京都大学文学部博物館蔵

図版第四



綾尾立遺跡出土縄文土器破片

京都大学文学部博物館蔵

図版第五

磨製　石斧　三個

綾尾立遺跡出土石器類　　石斧形打製器、土錘（左下）・石錘（右三個）

京都大学文学部博物館蔵

図版第六

清武加納遺跡出土弥生式土器　上　鉢形土器（高11糎）　　下　器台　（右現高20.3糎）

京都大学文学部博物館蔵

吾人は此の遺跡に於いて先づ高臺の北端に位してA地点を撰び、之に反対の西端傾斜面に近くB地点を取り更に中央部にC地点を設け順次是等の三地点を発掘して各部に於ける遺物包含の状態を験すると共に遺跡全体の状況を調査せんとせり。（第七図の上）

A地点に於いては丘陵の傾斜に沿ひて略ぼ南北に長き縦六尺、横二尺四寸の区域を発掘せるに地表下一尺までは灰色を帯びたる褐色土にして遺物を見ざるも、深さ一尺に達するや土質は黒色に変じて以下二尺数寸の間多量の土器を包含し、之に加へて四五の黒曜石、石板石の破片を認めたり。此の状態は土地の傾斜に依りて一様ならず低地に至るに従ひ包含層の厚さの減少を来せるが如し。而して南端にて地表面より三尺八寸以下は土壌褐色土となりて全く遺物の存在を見ず。

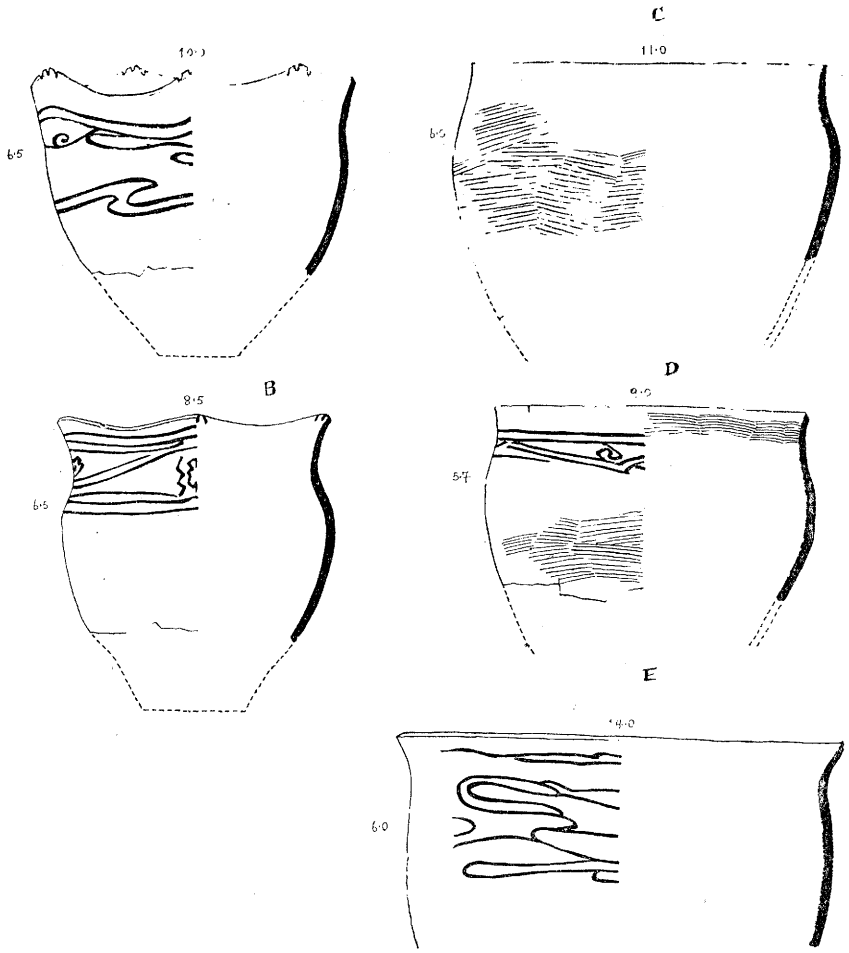
次にC地点はA・B両地点の略中央に位し、開墾に際し作れる幅九尺余深さ二尺内外の溝の一部なり。底部には既に黒褐色土の現はるゝあり、之より深さ三尺余の発掘を行ひたり。其の結果黒色土は表面下四尺内外にて灰褐色土となるも孰れの層にも遺物を認めざりき。

B地点は今次の調査に当り最も興味ある結果を得たる所なり。発掘区域は高臺の端に接したる部分に於て竪二十二尺、幅四尺余、深さ五尺五寸に及べり。（第七図の下断面図参照）表面下一尺は前二地点と同じく灰褐色の土質にして遺物なく、以下三尺乃至三尺七寸の間に亘って遺物の包含せる黒色土層あり、次に褐色土となる。包含遺物の状態を見るに発掘溝の北方に於いては地下約四尺と三尺五寸との両層位に錘石各一あり、約三尺の点に土器の底、同二尺六寸に土器の口部を存せり。南方にありては表面下三尺八寸にして無紋の鉢の口部と共に磨石斧一個を出し、三尺一寸よりは曲線紋ある径九寸の一種の縄紋土器、仝三尺より縁に突起あり且つ複雑なる文様を現はせる同式の鉢を得たり。此の他二尺七寸・二尺二寸の地点に土器底あり、其の一は弥生式土器の系統に近し。又た一尺二寸の層位より無紋の土器口部を出し、小破片に至りては随所に之を見たり。

是等三地点の発掘の結果を徴するに、綾の遺跡中遺物を包含せる部分は主として台地上の周囲に存在せりと覚しく層位は各部に於いて大差なきものたるを認む可し。ただ吾人の小発掘の結果よりすれば、北半の部分は包含の土器に破片多く且つ文様あるもの少なきものあるが如し。さて発見の遺物は石器類は数個にして土器其の大部分を占む。石器は石斧と錘石の二者あり、石鏃の類は黒曜石屑の存在を見しのみにて之を得ざりき。石斧の中磨製品はB地点の比較的深き層位より出土せるもの長二寸七分あり、其の両面は猶自然の地膚をのこせるも、蛤刃の部分は精巧に磨研せるを見る。半磨製の石斧は石質灰溶岩の如く短册形を呈し、概形を打ち欠きて作れる上更に一面を磨せるものなり。（図版第五の上）。打製石斧又存在し吾人は此の類を地表面に於いて採集したり。

錘石は上記B地点発見のもの二個の外に猶大形の一個あり。何れも特記すべき形式には非ざるも、前者の一は砂岩にて作り前後の切り欠き

第８図　　綾発掘土器形状図



の精妙なるは稍注意に値す。石器の類には他に扁平なる石材の周囲に打ち欠きを加へて扁桃形の器をなせる一と長二寸五分の軽石一個を見たり。

土器は何れも素焼の手づくね作りにして、此等の土器中表面赤褐色と灰褐色に一部黒味を帯ぶるもの及び黄褐色に近き色沢を有する類多く、焼方粗造の厚手に属し、質脆弱なり。されば稍形を存せるものも砕片となりて地中に埋もれ採集に頗る困難を感じたるも、B地点に於いては特に注意を加へて発掘を行ひ、上述諸層位に於て接合すれば略ぼ形を窺ひ得べき土器数個を得たり。図版第八に示す各は是れにして何れも口部大なる深き鉢の類なり、其の口径は一尺四寸と推定すべきもの最も大にして小なるも八寸を超ゆ。出土の小破片も大多数は此の類の器物の一部分なりと考へらる。而してこゝに注意すべきは上述器の二個は縁の部分に五ケ所若しくば六ケ所の耳状の突起を有

する事にて其の部に切り目を附せるは表面に印せる曲線沈紋様と共に縄紋土器の特色を有するものなり。

是等の土器は何れも中部（胴の部分）以下を缺失せるを以て底の形式は不明なるも別に採集せる底部の破片に就いて見るに底面径最小二寸六分、最大五寸の間各種あり。之に凡そ三形式を認むべく、一は底端より直ちに側の胴部に続ける式にて、二は此の部一旦クビレて更に開くの類、三は此のクビレの著しからざるものなり。此の第一類の底面の一に一種の條痕紋を印せるものあるを見る。

次に是等土器の表面にある文様を見るに最も単簡なるは縁或は其の内外面に切り目或は捺形紋を附したるに過ぎざるも、多くは装飾の局面広くして口部より胴部に及び文様の様式又た複雑なり。是等は何れも太き曲線沈紋より成り時に更に他の分子を加ふ。今其の主要なるものに就いて見るに其の一は図版第八の土器鉢Dに現はれたる式にして縁に近く二条の太き沈刻の線あり、其の下部を凡そ五等分して各の間に一個の渦紋を置き、中間より之の下部に連なる線を現し一の図様をなせるなり。

此の一層複雑となれる文様は図版第八のBにして中央の渦紋は一種の花状を呈せり。其の二は鉢の三に現はれたる類にして表面に二重に複線沈紋より成る一種の流水紋を現はせると、之の一層不規則となれるものなり。破片に就いて験するに此の類最も多きが如し。第三は所謂複合紋様とも称すべきものにして以上二者の何れかに加ふるに線の間一種のジグザグ紋・半円形・円形等の捺形紋・円紋・縦の条紋を以てせるものなり。吾人の得たる其の一々の様式は第8図の図に就て見る可く、従来発見のものを併すれば其の種類猶多数に上らん。

さて此の土器の特徴を通観する時は、何人も其の形式文様の著しく弥生式土器と異なり、所謂縄紋土器の系統に入るべきものなるを認む可し。されど更に之を詳細に見る時は又た自ら関東・東北地方のアイヌ式縄紋土器と異なるを知るべく、日向国内にても上記高千穂上原平発見の土器、宮崎附近出土の縄紋土器と一致せず、其の製作の手法の如きは寧ろ弥生式土器に近くして、ただ彼に比して粗製なる点を異にするに過ぎず、これは一般土器の研究上注意に値する事実なり。

以上は綾遺跡出土の土器の主なる形式なれども之に混じて小量ながら弥生式系統の土器の存在をも認め得たり。吾人今次の発掘に於いては土器底の一を除きて特に挙ぐべき遺品を得ざりしも、遺跡の表面殊に北西方面の調査にて採集せる破片四五あり。之は赤褐色の薄手なる鉢の口部の破片及び底部の突起状を呈する弥生式土器通有の形式に属するものなり。而して昨年八月若山氏発掘の際には北端部に於いて高坏の脚三個の出土して今徴古館に陳列す。是等は弥生式土器に最も多き形式の一にして、氏の談に依るに曲線文様ある厚手の土器と併存し両者に何等層位的の区別を認め難かりしと云ふ。果して然らば此の状態は薩摩指宿の遺跡に於て見る所と一致する所にして此の遺跡は一般古代土器の研究上に興味ある事実を示すものなり。

3 加納の遺跡

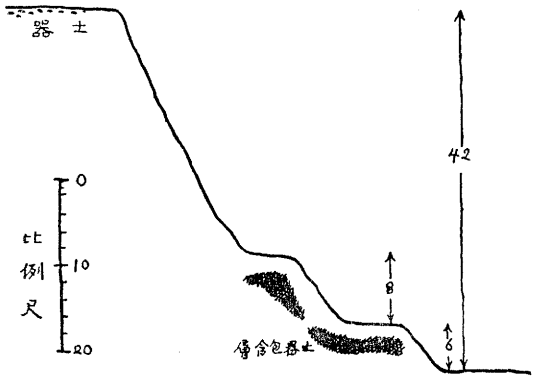
〔版図第六〕

宮崎郡清武村大字加納は宮崎町の南方約一里、飫肥に至る街道に沿ひ、村の北端に西より延びたる丘陵の高臺状をなせる所あり。俗に福神屋敷と呼び昨年五月の大風雨に際し土砂崩壊して多数の弥生式土器に混じ石斧数個を発見せるあり、同時代の遺跡なるを認めらるに至れり。

此の高臺は高き麓より約四十二尺あり周囲は比較的急なる勾配をなせるも上部は今畑となり平坦にして各所に少許の土器片の散在せるを見る。先に多数の土器類を発見したるは台地の東端福元勇吉氏の宅の側面にて又た北腹の中央に於ても採集せりと云ふ。此の両者の内前者は家屋ありて調査殆んど不可能なるを以て後者を撰び丘麓に近き傾斜面に幅二三尺の溝を北端より穿ち始め漸次之を進めて傾斜の第二段に近き部分に至りて東西約二十余尺に掘り拡めて遺物の埋没状態の調査を行へり。最初の地点にては地表面下約二尺乃至三尺の間は遺物を見ず、三尺に近くして黒褐色の土壌となりこゝに弥生式土器の破片を点々包含せり。而も其の数量多からざりしが第二の南北に掘り拡げたる地帯に至るや表土は約一尺五寸にして次の黒褐色の土器包含層は厚さ二尺以上に及び遺物頗る豊富にして弥生式土器には形の完全なる壺・鉢の類あり、石器としては凹石・軽石各一個を発見したり。是等の包含状態中注意を惹けるは、包含層の中央に当り弥生式土器片と混じて堅緻なる斎瓮の坏の破片の存せると、同じく弥生式土器中一種厚手の縄紋土器に近き鉢をたるの二事にして、遺跡の性質の考究上興味を惹く事実なり。

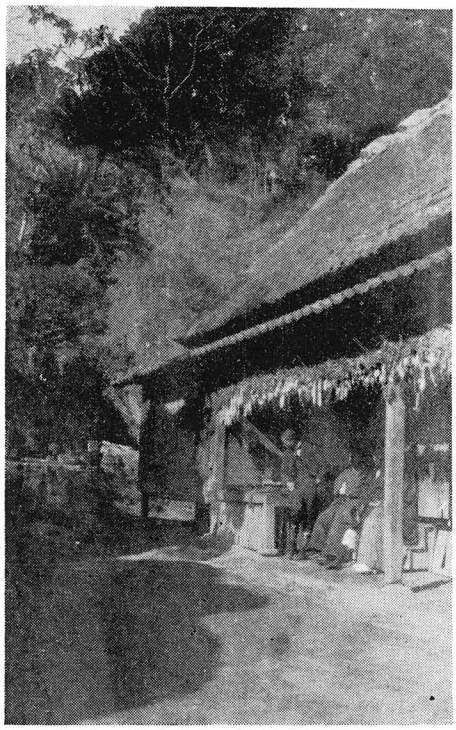
遺物中石器の類には凹石と軽石各一個を獲たること上述の如し。凹石は径二寸五分厚一寸二分の不正なる四角形をなし、其の両面に各一個の凹所を有するもの、軽石は径凡そ二寸あり。自然の形にて特に加工したる形迹なし。石斧は今次の調査に於ては出土せざりしも、前年発見の遺物（今徴古館出陳）を見るに打製磨製の両者あり、打製は小形して長三寸二分あり、磨製又た略ぼ同じ大さの蛤刃なり。凹石は此の遺跡にては数多く発見せらるゝ如く、吾人の見たるもの数個ありたり。

土器は小量の斎瓮を除き大部分は所謂弥生式土器の系統に属し、赤褐若しくば黄褐色の素焼なることは、其の鉢・壺・臺・高坏等の外形と共に最もよく此の種遺物の特色を現はせり。鉢の類は吾人の得たるもの数個あり。其の中の一は深鉢花状の而も特種の形を現し、他の一は



第9図　加納遺跡発掘地断層略図

第10図　加納遺跡一部状況

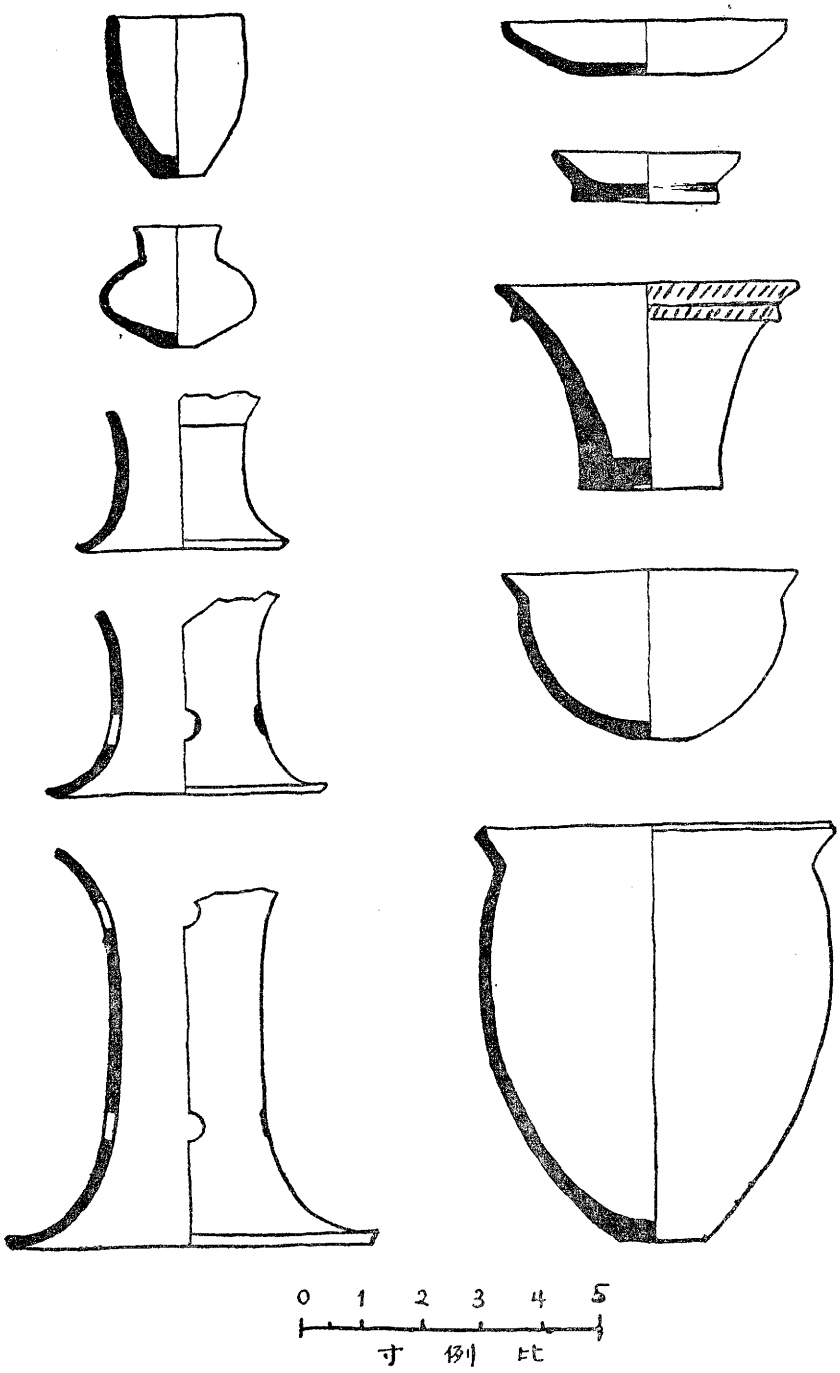


高三寸五分の厚手にして、口部外方に開け縁の外側に縄目帯あり、此の土器、焼方稍他と異なれるものとして先に注意せし所なり。壺は土器中最も数多く、破片の如きも多くこれに属するが如し。器の大さ、小は高二寸内外より大は一尺五寸に上り、其の種類口部の大いに開けるもの、頸部の僅に存するもの、口部の筒状を呈する等頗る多様にして其の所謂無花果形の式及び頸部の長き土器、縁部の著しく内側に折れ込みて口部部の小なる壺等は大和国新沢村大字一、河内国国府村、尾張国熱田貝塚等の弥生式遺跡より出土の遺品中に全然同一のもの存在せり。次に破片に就いて此の種器の細部を見るに、縁部は、其の外側に近く一条の突出部若しくば縄状帯を有せると縁端広くなりて内側に曲りこゝに各種の文様を加へたる二者を主とし、一二縁の水平に外方に開けるものあり。胴部に於いても縄状帯あるもの往々存す。

底部は其の形式最も多様にして大さ又た一様ならず。然れども底の突起して安定ならざるものと外側にクビレある比較的小形の類多きを占め中には底面の内側に凹入して糸底形を呈せるものも少なからず、又た漏斗状の底の一には円孔の外部に貫通する例を見たり。

土器臺には上下端開ける長大なる筒形のものと坏に近き円板形の二者あり。前式其の数多く、中には縁の外側に折れたる形と筒の径六寸に余る異形を出せり。高坏は吾人の採集品には完全なるもの一も見ざりしも脚の類は存して、その基部に対する開きに凡そ四種類の別あると、之に円孔穿てると然らざるの二式あるを知れり。複合形式としては此の外壺に台の附せる一部分かと思はる大形破片あり、土製品には素焼の錘を見たり。

是等土器に表はれたる文様は、形式の多様なるに反し比較的少し。主なる文様の分子は所謂波紋と縄目紋にして直線紋之につぎ、縁部を飾れる中には円紋と切目紋を認められる。此の中波紋は斎瓮に表はるる所と連絡を有するものゝ如く、縄目紋の多きと共に興味を惹く。要之加納の遺跡は弥生式土器の遺跡としては遺物の豊富なる点に於いて注意に値すべく、上述個々の遺物に就いては近畿出土の弥生式土器と全然同一形式のもの少なからず此の種土器の一般性質を考察する上に重要なる資料を供するものなり。



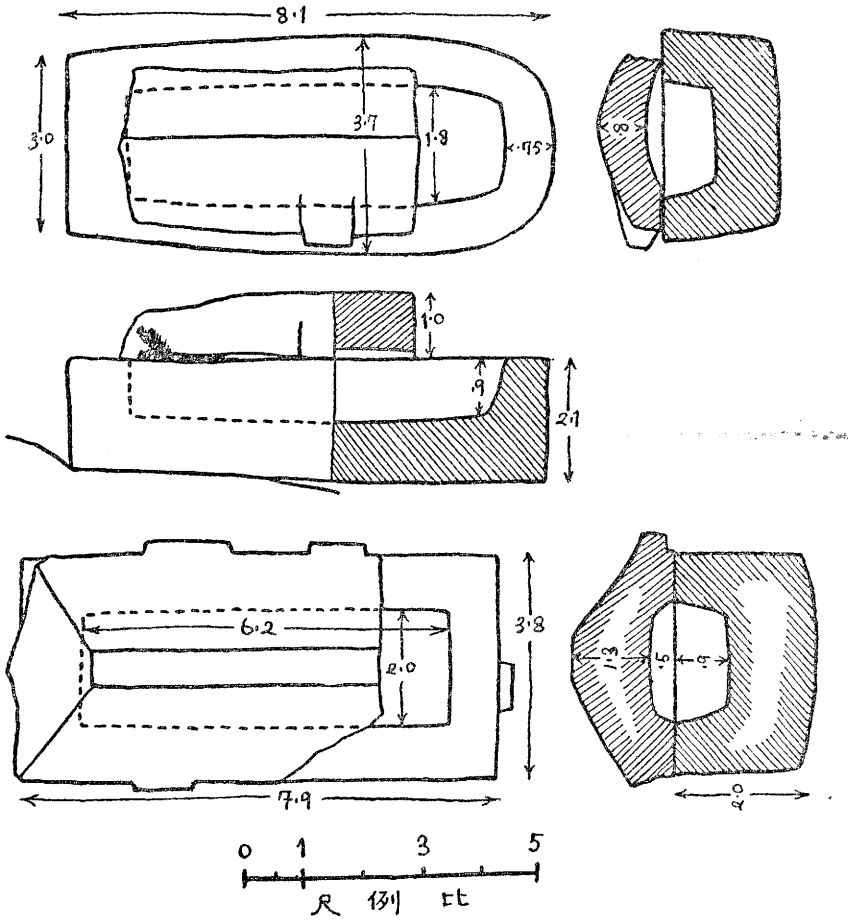
第11図　加納遺跡出土土器形状図

五　各地に於ける古墳

以上は今次の調査行に際主として調査せる石器時代遺跡の概要なるが、此の行又其の調査の余暇を以て各地の古墳を調査せるもの少なからず。一例を挙げんか東臼杵郡南方村今井野苗圃の古墳及同大貫の石室墳墓の如き、西臼杵郡三田井の横穴の如き、或は宮崎郡瓜生野村の横穴の如き是れなり。是等の遺跡に就いては固より一定の方針を以て調査を行ひしにあらず、精粗の程度又た必ずしも一ならざるも、其の多くは従来未だ実際に関する報告を欲くの憾あるものなるを以て、こゝに調査の順に従ひ簡単に其の古墳の構造形式を報告することゝなす可し。

1　今井野苗圃の古墳

南方村今井野苗圃内に三個の古墳あり。事務所の附近に散在し何れも小形の丸塚にして其の一には堀抜き石棺露出せり。此の塚今封土の径三十尺、高さ僅に三尺に過ぎず。石棺此の略ぼ中央にあり、東西に半以上を露はす。棺は灰溶岩を以て作り、構造は身は舟型式に近く長さ八尺一寸、幅



第12図　苗圃内石棺（上）及野田石棺（下）測図

中央にて三尺七寸あり。蓋は半ば欠損せるも、家型の把手を有する式の如く、今ま其の一を存せり（第12図の上）発掘の年次明ならず。遺物の徴すべきものなきも、前年有馬七蔵氏は封土の北方畑地に於て銀環一個を拾得せりと云へり。

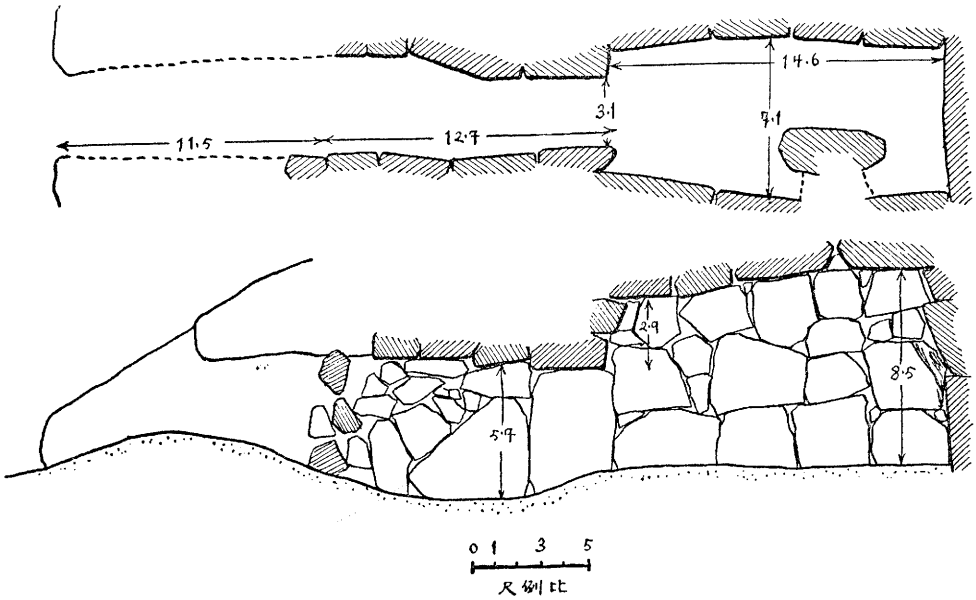
2　野田の石棺

南方村大字野田の北端臺地上に一古墳あり、石棺を露出す。構造家型の掘抜き式にて、蓋身の二部より成り長七尺九寸、幅三尺八寸総高四尺二寸あり。石質は灰溶岩にして畿内地方に多き同式棺と全然軌を一にせり。（第12図の下）今蓋の一部に欠損あり、其の破片はなお道傍に存せり。

3　天下及び大貫の塚

南方村の中央五ケ瀬川を狭みて存せる天下及び大貫の丘陵上には古墳頗る多し。天下に於ては川に沿へる高台上に嘗て鳥居龍蔵氏の調査せる古墳あり、同村の氏神社は雄大なる前方後円墳の上に建ち、附近又石棺を有する円墳少なからず。是等の古墳の内前方後円形を取れるものを称して地方人士は俗に柄鏡塚と呼び一種特有の形式の如くみなせるも吾人の実見せる所にては所謂前方後円墳と何等異なる点を見ず。

大貫は先に挙げたる貝塚の存する所これより西方の丘陵上丸塚点在せり。中に就いて注意を惹けるは松村宗助氏住宅の西方に在る丸塚にして日向国にては類例多からざる石室を有せり。塚は半径三十尺内外、高さ



第13図　大貫村古墳石室実測図

約二間の丸塚にして葺石はあるも、埴輪円筒はなく南側に石室の口を開く。構造羨道玄室の二者より成り、玄室の全長十四尺六寸、幅中央にて七尺一寸、高さ八尺五寸、羨道は長さ十二尺七寸あり。形式は畿内に於いて普通に見る類にて特に記すべきなきも、たゞ其の戸口は封土の端より十一尺の奥に開き、この外部に丸石を以て閉せる痕を存するは従来不明なるを常とする戸口の構造を窺ひ得る点に於て注目に値する事実なり（第13図）